中国北京の町屋の建築形式と空間構成に関する史的研究

A HISTORICAL STUDY OF BUILDING TYPES AND SPATIAL COMPOSITION OF TOWN HOUSES IN BEIJING, CHINA

笠井 健*, 高村 雅彦**
Ken KASAI and Masahiko TAKAMURA

This study deals with building types and spatial composition of town houses in the old Beijing city. The author's own field measurement results indicate that there are two types of buildings. By studying the urban structure (such as the skeleton of streets, block composition and subdivision) and various other social considerations (including the population, real estate activity, and house tax), and by using documentary and pictorial sources, the author concludes as follows.

The first is a town house with posteriorly continuous ridges, built in dense commercial areas of small blocks. The second is a town house which also spreads back, but with courtyards in the middle. This courtyard-style was built in commercial areas with bigger blocks, facing onto arterial streets. In both cases, town houses, due to the location, expanded their shop area and created diverse spatial compositions. This study also shows that the first type originated with squatters taking over streets.

Keywords : China, Beijing, Urban structure, Building type, Town houses, Courtyard houses

中国, 北京, 都市構造, 建築形式, 町屋, 四合院

1. はじめに

中国の歴史的な都市の中でも、北京は宮城を中心に基盤目状の道路骨格で構成される代表的な都市として知られる。また、中庭を四つの棟で取り囲む四合院住宅は、北京のそれをもって典型とされる。北京は、元代(13世紀中期)から行政都市として中国の中心であり、一方で商業都市としても発展しつづけてきた。それは、行政区としての「内城」と商業区の「外城」といった都市構造^{注1)}に表象されている。しかしながら、皇帝をはじめ、多くの貴族や官吏が居住した帝都としてのイメージが強く、従来の建築史研究では、宮殿や四合院ばかりが注目されてきた。したがって、北京の建築に関する多くの既往研究は、宮殿や宗教施設をはじめとしたモニュメンタルな建築や四合院住宅を対象としたもので、町屋に関する研究は数件に限られる^{注2)}。しかも、個々の建築を単体として取り上げていて、それらの集合のあり方や敷地規模など、都市構造との関わりから考察したものも少ない^{注3)}。

そこで、本稿は北京における町屋としての建築形式を見出し、その空間がどのように構成されてきたのかを歴史的に解明することを目的とする。中国における店舗建築は、中庭式の住宅の系譜として捉えられることが多く、日本の「町屋」に相当する建築形式は見出されていない^{注4)}。北京も同様である。しかし、北京では行政区と商業区の二面性が強く表れていることが影響して、四合院住宅とは明らかに異なる建築タイプが見出せる。北京の伝統的な店舗を町屋と

いう一つのビルディングタイプとして位置づけることは、北京における歴史的な建築の全体像を把握する上でも、また中国全体の建築史研究の面でも重要であろう。

本稿は、北京の町屋について、都市構造や社会的背景との関わりに着目しながら考察する。第一に、実測調査を行った成果をもとに、その立地や形態から町屋の建築形式を示す。その上で、都市全体の骨格、街路、街区形態、敷地割りからなる都市的文脈の中で、いかに町屋が成立したのかを明らかにする。こうしたフィジカルな視点に加え、社会的背景との関係を指摘する。第二に、商業形態に重点をおいて、町屋の空間構成の特質を明らかにする。本稿では、現地調査で収めた26軒の実測成果、ならびに1750年頃の北京城内の地図『乾隆京城全図』^{注5)}、および18世紀に描かれた『萬壽盛典図』、『日月合璧五星聯珠図』、『京師生春詩意図』^{注6)}の絵画史料、加えて清末1908年の『北京誌』^{注7)}などの文献史料を使って分析する。また、清代18世紀初頭から20世紀初頭までを研究の対象とする。

2. 町屋の建築形式と成立背景

2-1. 町屋の建築形式

現地での実測では、簡単なプランをとったものが60軒、そのうち詳細な実測調査を行ったものが26軒ある。その概要について、建物の向き、敷地規模^{注8)}、中庭形態などを表1に示す。

町屋の敷地規模についてみると、間口は約3メートル(1間)か

* 法政大学 リサーチアドミニストレーター・修士(工学)

** 法政大学デザイン工学部建築学科 教授・博士(工学)

Research Administrator, Hosei Univ., M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Hosei Univ., Dr. Eng.

ら約18メートル（6間）^{注9)}と幅があるが、全体的には6メートル（2間）から10メートル（3間）の範囲にあるものが多い。奥行きに関しては収束する傾向が見られない。全体としては間口が狭く後方に長いという特徴が見られ、中国江南地方の住居^{注10)}や近世京都の町屋ときわめて類似した形態をもつ。

一方、北京の四合院住宅は、同様に後方に長いものの、間口が広く^{注11)}、敷地の規模や形態が町屋とは大きく異なっている。たとえば、清代1761年の『日月合璧五星聯珠図』でも、店舗と住宅とでは描き方が明確に区別されている（図1）。そこで、本稿ではまず町

表1 実測調査対象リスト（1993～96年）

所在地	元用途	建物 向き	敷地規模 間口奥行 (m)	階数 *1	中庭形態 アリ ナシ	棟配 *2	建設年代*3
勾連搭式店舗	廊房二条90号	金融機関	北 3 16	1	○	—	不明
	廊房二条92号	塗料	北 3 16	2全	○	—	不明
	烟袋斜街1号	不明	南 6 5	2全	—	—	不明
	崇文門内大街23号	不明	西 7 10	2セ	—	—	不明
	隆福寺街30号	本	北 7 18	1	○	—	不明
	門框胡同18号	毛皮	西 9 17	1	—	○	不明
	前海東沿20号	食堂	南 9 12	2全	後庭	—	不明
	西打磨廠139号	筆	南 9 10	1	○	—	不明
	地安門大街101号	宝石	東 10 14	2セ	—	○	不明
	東四南大街6号	布	西 6 12	2正	○	—	分散不明
中庭式店舗	西打磨廠75号	旅館	南 7 35	3全	—	○	結口不明
	石頭胡同113号	遊郭	東 7 27	2全	○	—	結口不明
	銭市胡同	金融機関	北 8 10	1	○	—	分散清末民初
	西打磨廠275号	旅館	南 8 62	1	○	—	分散不明
	安定門内大街233号	紙	東 10 42	1	○	—	分散不明
	鼓樓東大街11号	不明	南 10 17	2正	○	—	分散不明
	西打磨廠155号	旅館	南 12 65	3倒	—	○	結口1920年代初
	大力胡同3号	料亭	南 13 15	2全	—	○	分散不明
	鴉儿胡同9号	油	南 16 83	1	—	—	分散不明
	韓家胡同20号	遊郭	北 16 27	2全	—	○	結口不明
	西打磨廠222号	金融機関	北 17 20	2倒	—	○	分散不明
	百順胡同18号	遊郭	北 17 23	2全	○	—	分散不明
	煤市街98号	料亭	南 17 23	2全	○	—	分散不明
	西打磨廠218号	質屋	北 18 20	2正	○	—	分散不明
	西河沿67号	旅館	南 18 36	3全	—	○	結口1920～39年
	西打磨廠22号	旅館	北 18 46	2全	—	○	結口不明

*1 階数: 数字は階数を示す。全: 全て多層化、セ: 2階以上がセットバック、正: 正房が多層化、倒: 倒座が多層化

*2 棟配置: 中庭を囲む棟の配置状態を示す。

分散: 各棟分散配置、結口: 各棟口字型に結合、結口: 各棟口字型に結合

*3 建設年代が不明なものについては、建築の構法や磚の積み方、老朽化の程度などから、多くは清代後期から民国時代初めのものと判断される。

図1 『日月合璧五星聯珠図』に見る店舗(上)と四合院住宅(下)

屋の空間構成と立地条件の相互の関係から、以下の二つの建築形式^{注12)}が見出せることを示す。

(1) 勾連搭式店舗

四合院住宅に見られる左右の廂房がなく、平入りの棟を前後に連続して全体を構成する形式である（図2）。この種の空間構成は「勾連搭」と呼ばれ^{注13)}、主に北京の町屋に特徴的に見られる形式と言える。実測成果の敷地規模は、間口3メートル（1間）から10メートル（3間）、奥行き5メートルから18メートルで、四合院住宅と比較すると、間口が狭く奥行きも短い、狭小な敷地に作られることが特徴である^{注14)}。この形式は、内城の幹線道路周辺や外城の前門外付近、とりわけ幹線道路から分岐する支線道路沿いの間口の狭い敷地が高密度に並び商業地によく見られる。

図2 勾連搭式店舗の例

(2) 中庭式店舗

四合院住宅と同様に左右の廂房をもち、中庭を挟みながら奥行き方向に展開して全体を構成する形式である（図3）。この種の空間構成は中国全土に見られる中庭建築と同類である^{注15)}。実測成果の敷地規模は、間口6メートル（2間）から18メートル（6間）、奥行き10メートルから83メートルで、間口が比較的広く奥行きも深いことが特徴である。この形式は、同じ幹線道路沿いでも敷地の狭い内城ではほとんど見られず、間口が広くとられた外城のほうに多い。

図3 中庭式店舗の例

この二つの形式に相当するものが清末1908年の『北京誌』に記録されている。「商店には舗と局との別あり。局とは寺観の一部又は普通の民家を借りて業を営むものにて特別の構造を有せず。舗は直に街に臨みて開き商店としての特別の構造を有せるものを云う。舗は通例兩層房とす」^{注16)}とある。すなわち、「舗」が勾連搭式店舗、「局」が中庭式店舗に該当すると考えられる。

2-2. 都市構造との関係

二つの町屋の建築形式は、商業地と住宅地の敷地割りの在り方、敷地の規模や形態などの立地条件に左右され、とりわけその違いを明確に見せる内城と外城の都市構造が強く影響して成立したものと考えられる。

(1) 内城

北京では、城門から伸びる幹線道路を「大街」といい、そこから分かれる支線道路を「胡同」と呼び、一般的に大街は商業地、胡同は住宅地を指すことが多い。このことは、商業地と住宅地を明

解に区別する中国都市の都市構造の特徴そのものを示唆している。

そもそも中国では、紀元前2世紀頃から、都市内の街区を牆壁で囲い、商業区の「市」と居住区の「坊」を厳格に区分していた。その後、9世紀の唐末から次第に牆壁が取り除かれ、店舗が都市全体に展開するようになるものの、幹線道路に沿って商業地が形成され、そこから分岐する支線道路に住宅地が形成される傾向が強い^{注17)}。

基盤目状道路の北京の内城もまた、南北方向の幹線道路を商業地、そこから東と西へ伸びる支線道路を住宅地とするケースが大部分を占める。住宅地では、東西方向の道路に沿って短冊状の敷地が連続し、南向きを理想とする四合院住宅が優先的に並ぶ。したがって、商業地を形成する南北方向の道路沿いの敷地は奥行きが短くなり、さらにできるだけ多くの町屋が道路に面することができるよう、間口も狭く割られる。(図4)。こうした敷地割りの特徴は既往研究でも明らかにされている^{注18)}。また、1761年の『日月合璧五星聯珠図』には、幹線道路沿いに間口1間から3間の町屋が並び、その裏側にゆったりとした敷地に立つ四合院住宅が描かれている(図5)。

このように、奥行きと間口がともに狭小な敷地条件にあつては、廂房や複数の中庭を持たない勾連搭式店舗が最も適した建築形式となる。こうした内城独特の都市構造こそが、勾連搭式店舗を成立させる要因となったと考えられる。

(2) 外城

外城は建物が密集して面的に広がる商業地であり、内城のような明快な都市構造は見られない。しかし、ある一定の傾向が見られる。それは、城門から伸びる幹線道路に沿って奥行きの長い敷地が短冊状に並び、その裏側に小規模な敷地が高密度に展開するという、内城とは逆の都市構造である(図6)。

このように、幹線道路に沿って大きな町屋が建ち並ぶ都市構造は、商業に特化した中国の都市によく見られる。言い換えれば、この種の都市は、まず幹線道路を往来する利用を優先して市街化が進んだと捉えることができる。1750年頃の『乾隆京城全図』には、当時ほとんど市街化の進んでない外城のある地域では、幹線道路に沿って中庭を挟みながら奥へ展開する建物が並ぶ様子が描かれ、道路を軸に市街化が進んでいる過程が読み取れる(図7)。

中庭式店舗は、四合院と同様に廂房と複数の中庭を持つため、広い敷地を必要とする。したがって、外城が商業に特化した性格を持つということだけでなく、幹線道路に沿って広い敷地を確保できる

という都市構造こそが、中庭式店舗を成立させる要因になったと考えられる。

2-3. 社会的背景との関係

北京の町屋の形成過程については、清代の人口や職種、不動産売買、税金などの社会的背景からの考察も欠かせない。

(1) 外城の町屋と人口、職種との関係

清末1907年頃の北京を記録した『天咫偶聞』によると、「内城の建物は外城とは異なる。外城のそれは南方風で、中庭、建物ともに狭小である。一方、内城の建物は、中庭、建物ともに広々としていて、建物の高さも高い」^{注19)}とある。この記録と同じ時期の1910年の人口および人口密度は、外城が約32万人で、約3万人/平方キロメートル(外城北側の可住域)、内城が約47万人、約1万3千人/平方キロメートルであり^{注20)}、外城は内城より約2.5倍も人口密度が高い。また、1908年の職業別人口の割合は、外城の人口の約6割が商人や手工業者で、内城は約6割が八旗人や官吏であった^{注21)}。

そもそも、内城の人口は18世紀中期の乾隆年間をピークに以後減少傾向にあり、外城の人口は清朝設立以降、増加を遂げ^{注22)}、上記のような状況へ至った。その原因として、内城の八旗人に対する外城への移住規制の緩和(康熙中期)^{注23)}、流民に対する外城への移住規制の緩和(乾隆中期)^{注24)}などがあげられる。18世紀初めから、こうした要因によって外城は著しく都市化が進み、外城に見られる特徴的な町屋が形成されていったと考えられる。

(2) 内城の町屋と不動産売買との関係

18世以降、流通経済が急速に発展する中、八旗人の貧富の格差が開き、もともと禁止されていた八旗人の所有する土地家屋を売り出す行為が多くなる。張小林『清代北京城区房契研究』(中国社会科学出版社、2000)によれば、乾隆年間に不動産売買がとりわけ活発になったと指摘している。特筆すべきは、その乾隆年間の不動産契約のうち8割前後が八旗人の住む内城での売買であり、しかも土地家屋全体ではなく、道路沿いの建物「門面房」や店舗「店面房」、母屋「正房」などが棟ごとに切り売りされ、なかでも門面房が最も多い点である^{注25)}。門面房は道路沿いにある長屋状の建物であったことから、間口方向に細分化が進み、のちに個々が改築されることで、結果的に間口の狭い町屋が並ぶ内城の都市構造の特徴を促進する要因ともなった。売買後の建物の用途は明らかでないが、当時、営利目的で家屋を解体、販売したという習わしがあった^{注26)}ということ

図4 内城での町屋の立地概念図

図5 幹線道路沿いの小さな店舗と、その裏側にあるゆったりとした四合院住宅(『日月合璧五星聯珠図』)

図6 外城での町屋の立地概念図

図7 奥行きの方向に伸びる建物群(『乾隆京城全図』をもとに作成)

から、店舗として転用、改築されたことは容易に想像できる。

実際に、『乾隆京城全図』と近年の地図の比較分析から、こうした状況を読み取ることができる(図8)。東西方向の幹線道路沿いにある大規模な四合院の前方部分が細分割されて小規模な町屋が並ぶケースや、南北方向の幹線道路沿いにある長屋状の建物とその後方の庭が細分化されて町屋が並ぶケースが認められる。

図8 敷地の細分化の例：上は1750頃の『乾隆京城全図』、下は1978年の都市図(ともに原図から作成)

(3) 間口と税金との関係

北京の町屋に共通する特徴として間口が狭いことがあげられる。それには建物の間口と税金が深く関係していることを指摘したい。まず、中国の家屋に対する課税として「屋税」というものがあり、これまでの既往研究では、一般に唐代では、間口方向と奥行き方向で算定する「間架税」、宋代では間口の間数と広さに応じて税を算出する方法が明らかになっている(注27)。その後、元、明、清代の課税方法についてはあまり明らかになっていないが、一般には元代以降、屋税や間架税はなくなったとされ、ただし明清代においては、国の財政危機や軍資金不足の際に、一時的に家屋を課税対象にしたようである(注28)。たとえば、清代の康熙15(1676)年に実施された課税の方法は、「税天下市房」「不論内房多寡、惟計門面間架、毎間稅銀二錢、一年即止」(店舗は、内部の部屋の数にかかわらず、道路沿いの建物の間口の間数によって、1間当たり二錢銀を徴収する)(注29)というものであった。つまり、宋代の税の算定方法は、敷地内のすべての建物の間口と奥行きの両方が対象となったが、清代では一時的ではあるが道路沿いの建物間口の間数、すなわち敷地間口の規模によって算出したということになる。それゆえに、間口が狭く奥に長い町屋が形成された一つの要因として、課税対象となる敷地間口をできるだけ狭くし、課税の対象とならない後方に空間を拡大する必要があったことを指摘できるのである。

3. 町屋の空間構成

3-1. 商業形態と空間構成の関係

これまでに、勾連搭式店舗と中庭式店舗の二つの町屋形式について、それぞれ異なる都市構造や社会的背景との関係を考察してきた。

本章ではこうした考えの上で、これらの町屋が特徴ある敷地の中にどのような機能を配置して空間を構成しているのかを考察する。

(1) 商業形態にみる空間の使われ方

店舗とは、日本語で「商品を販売するための建物。みせ」を指すが(注30)、中国ではもともと二つの意味がある(注31)。「舗」とは小売店を、また「店」とは旧時の倉庫や旅館などを指しており(注32)、古くから二つの商業形態が存在することを意味している。つまり、この商業形態の違いは、「舗」は店先で接客をする店舗、「店」は店内部で接客をする店舗という、空間の使われ方の違いを表わしている。

そこで、現地調査の成果と文献史料(注33)の考察から、各商業形態の空間の使われ方について、二つの町屋形式の図面上に

図9 各商業形態の空間の使われ方：上図は小売店等、下図は旅館や料亭等

対応させると、図9のようになる。小売店などの町屋(主に勾連搭式店舗)は、道路に面した棟が帳場や陳列棚などのミセ、次の棟が応接室や倉庫などのサービス、そして中庭を挟んだ最後の棟が居室となる。旅館や料亭などの町屋(主に中庭式店舗)は、道路側の棟が調理場や帳場、店員の部屋、その後方の中庭を取り囲む三つの棟が客間となる。

北京の町屋は、この二つの利用形態のうち、商いの場と居住の場を前後に配置する前者が主流となる。これは、北京に限らず中国全土で見られる「前店後宅」という最も一般的なものである。

(2) 町屋の基本型

商いと居住のプリミティブな関係をよく示す北京郊外の店舗では、道路に面する棟をミセ、作業場を兼ねる広い中庭を挟んで、後方の棟を居室としている(図10)。つまり、都市化が進んでいない地域の店舗では、ミセと居住の機能をそれぞれ配した二つの棟からなる最小限のユニットで空間が構成される。

それに対し、都市部に立地する町屋は、ミセと居室とは別に、大量の物品を保管する倉庫や数多くの客を引き入れるための接客空間を必要とする。しかし、敷地の間口が狭く奥に長いといった立地条件にあるため、その敷地の利用形態は同様の傾向を示す。まず、敷地の前部をミセ、次に応接間や倉庫などサービス、そして後部を居室にするといった、三つの機能を奥行方向に配置する傾向が強い。こうした敷地や空間の使われ方は、その町屋の形式や規模の大小に関わらず、北京では顕著に見られる。

北京の商業地の構造には大きく二つのタイプがあり、一つは幹線道路に沿って間口が狭く奥行きも短い狭小な敷地が連続するもの、もう一つは間口が狭く奥に長い短冊状の敷地が連続するものであ

た。そして、それぞれの構造と結びついて成立した勾連搭式店舗と中庭式店舗に対し、上記三つの機能を考慮すると、それぞれの形式の基本となる空間構成を見出すことができる（図11）。

まず、勾連搭式店舗が建ち並ぶ商業地では、一般に奥行き15メートル前後の敷地が道路沿いに連なる。この敷地は、三つの棟と一つの中庭を奥行き方向に並べることができる規模に相当する。したがって、広い面積を必要とするミセとサービス（接客・倉庫）の空間は、道路側の二つの棟を連結させた「前房」に配置される。また、居住空間は中庭を挟んだ「後房」に置かれる。つまり、ミセとサービスをペアにしたユニットと、小さな中庭を含む居住のユニットからなる構成が、勾連搭式店舗の基本型となる。

一方、奥に長い中庭式店舗が連続する商業地では、奥行き45メートル前後の敷地が連なっている。この敷地は、四合院でいう「倒座」、「庁房」、「正房」のそれぞれを中庭に面して前後に配置できる規模に相当する。したがって、基本構成は道路の沿いの倒座に相当する棟をミセとし、その後方をサービス空間、最後方を居住空間とする構成になる。全体として見れば、これもまたミセとサービス空間からなる四合院のユニットと、居住空間の三合院のユニットの、二つのユニットからなるものとして捉えることができる。

このように、町屋の基本となる空間構成は、商業地の構造や敷地の規模、そして機能との密接な相互関係の上に成り立っている。いずれも、町屋は縦に長い敷地の上に立地しているため、職住に不可欠なミセ、サービス（接客・倉庫）、居住の三つ機能を、前方から後方に向かって配置する点は共通している。

3-2. 町屋の多様化

勾連搭式店舗と中庭式店舗の機能の分離・拡張の方法には、共通した原則が見出せる。それは、いずれのタイプも敷地の前部を商い

図10 北京郊外の店舗（劉敦桢『中国住宅概説』建築工業出版社、1957より作成）

図11 勾連搭式店舗（上段）と中庭式店舗（下段）基本型

の場所とするため、道路沿いの棟を多層化あるいは連続させ、ミセの面積を拡大することである。つまり、貴族や官吏が居住空間の拡大を重視するのに対し、利益を追求する商人は居住空間より、むしろ商いの空間をいかに拡大するかを重視した。商いの空間である道路沿いの棟を多層化・連続化している状況は1750年頃の『乾隆京城全図』からも確認できる（図12）。

こうした共通する原則をもちながらも、両者は敷地の規模が異なるため、そのバリエーションには異なる展開を見せた。

(1) 中庭式店舗の多様化

中庭式店舗は、四合院と同様、中庭を挟みながら後方へ展開することを特徴とするが、その空間構成は大きく二つに分けられる。第一に、奥行き20から30メートルの中規模なもので、一つの中庭を中心に構成するものがあげられる。一般に、倒座部分をミセや使用人室とし、作業場を兼ねる中庭を挟んで、正房を居室とする。また、

図12 道路沿いの棟を多層化または連続化する大柵欄付近の店舗（『乾隆京城全図』より作成）

図13 町屋の多様化模式図

両脇の廂房は倉庫などの付属屋とし使われることが多い。したがって、複数の機能が一つの中庭に面して混在するため、とりわけ倒座部分を2階にしてサービス機能などを分離させるケースが多く見られる。また、銀号などの中庭を利用する町屋では、正房を2階にして職と住の場を上下に分離させるものがよく見られる(図13)。

第二に、奥行き45メートル以上の大規模なもので、敷地の手前から、ミセ、サービス、居住の機能をユニットごとに配置することができる理想的な構成を示す。したがって、機能の分離が完了しているため、もはや多層化はあまり見られない。

このように、中庭式店舗は奥行き方向に機能を分離する四合院住宅と同様の展開を見せるが、敷地前部の棟を多層化させ、店舗機能を拡張する点は、中庭式店舗の最大の特徴といえる。

(2) 勾連搭式店舗の多様化

狭小な敷地に立地する勾連搭式店舗は、間口が1間から3間、奥行き20メートル以下と狭く、一般の四合院の半分にも満たない。そのため、多層化によって機能の分離を実現するケースがまずあげられる。前房と後房からなる基本構成を、総2階建てにするものもあれば、前房のみを多層化するものもあり、そのタイプは様々である(図13)。しかし、いずれも1階をミセやサービスなどの職場とし、2階を居住空間とすることが、職住分離の基本的な原則となる。

一方、多層化とは別に、二つ棟を連結させた前房に、さらに複数の棟を連結させ販売スペースを拡大するといった展開が見出せる。当然、建築全体は敷地境界線に収まってはいるが、前房と後房のバランスを見ると、棟を幾重も連ねる前房が、道路方向へ張り出しているイメージが強い。『乾隆京城全図』は、道路へ棟を張り出した店舗の壁面線は凹凸をなし、道路が不法占拠されている状況を描いている(図14)。つまり、中庭式店舗とは異なり後方へ展開できる立地条件にないため、前方に張り出すことによって機能を拡張するという、中庭式店舗とまったく逆の方向への展開が生じているのである。この行為は屋根を連続する勾連搭の形成過程とも深く結びついているであろう。

図14 道路を占拠した建物群(『乾隆京城全図』より作成))

3-3. 勾連搭の形成過程

勾連搭は北京地方で特徴的に見られ、店舗に多用されている。このような屋根構造は、広い室内空間をつくるために使用されるものであり、邸宅や寺廟、劇場など大規模な建築に用いられるものでもある。また、「抱厦」と呼ばれる屋根の形式、「垂花門」の中で等級の高い「一殿一卷式」という門の形式など、格式の高い構造に類似している。

中国人はとくに面子にこだわるといわれ、門構えや店構えを重視した。18世紀初期の『燕京雜記』には「京師の商店はかねてから店構えを重んじ(後略)」^{注34)}と記されていることから、勾連搭が格式

を表現するための一つの手法として用いられたと推測できる。また、清末1908年の『北京誌』には「茶館建築はみな勾連搭蓋を用ひ、多いものでは六、七層の房屋からなる」^{注35)}と記され、都市のサロンとなる茶館についても多用されていたことから、勾連搭があらゆる建築に流行していたことが知られる。では、勾連搭がいかなる要因のもとに形成されたのか具体的に考察したい。

(1) 形成の要因

勾連搭が形成された要因は2点ある。まず、大量の品と多くの客を入れるために、広い室内空間を必要としたからである。とすれば、多層化するのが一つの手だが、そもそも北京は帝都であるゆえ、一般の建物は2階以上に建てるのが基本的に禁止されていた^{注36)}。

『乾隆京城全図』をみると、最も繁華な商業地の大柵欄付近でさえ、勾連搭と見られる建物が多く、2階建ての建物は少ない(図12)。

二つめとして、御幸における安全性の面から、店舗は2階の前面部分を1階の外側の柱より約1メートル以上後退、すなわち「暗楼」に改築するよう規制されたことである^{注37)}。この規制に対して既存の建物の改築は困難

であるため、その前面に1階の建物を増築したと想像される。1761年の『日月合璧五星聯珠図』には、店先に仮設のような屋根を架け足し「暗楼」にしている建物が多数見受けられる(図15)。

図15 屋根を架け足した店舗群(『日月合璧五星聯珠図』)

(2) 形成過程

北京の文化・経済が開花した17世紀後半から18世紀後半は、建設活動が非常に活発であった。その活発さを表わす代表的な例が街路の不法占拠、すなわち「侵街」^{注38)}である。北京で最も繁華な商業地で、前門(正陽門)から南へ伸びる3本の道路がその状況を顕著に示す。『日下舊聞考』に見る1700年頃の記録には「北京正陽門前に柵の家を建て、之に居して肆(店)をなす」^{注39)}とあり、その後の1750年頃の『乾隆京城全図』にはそれらが常設化している様子が認められる(図16)。北京の勾連搭は、こうした侵街と密接に結びついて成立したと考えられる。では、いくつかの絵画史料や文献史料、実測図等から想定してみたい。

まず、連結させた屋根をもつ店舗そのものは、宋代の開封で既に見られる。1100年頃の『清明上河図』では(図17)、店先から商品

図16 店舗の前に露店が建ち並んで常設化し、後に三本の道が形成された。(左『京師生詩意図』、右『乾隆京城全図』)

が溢れ出し、その上に屋根を架け足している店舗がいくつも確認できる。北京では、18世紀初頭の『萬寿盛典図』に勾連搭式の店舗が描かれており（図18）、しかも道路沿いに並ぶ店舗の多くは道路に迫り出して建てられている。また、その後の『京師生詩意図』や『日月合璧五星聯珠図』にも屋根を道路側に張り出している店舗が多く描かれていて、侵街による屋根の拡張が一般化している。

そもそも、勾連搭の「搭」という語は、「組み立てる・架ける」^{注40)}などを意味し、仮設物を建てる時に用いる言葉である。また、勾連搭特有の片流れの屋根のことを「拍子:paizi」^{注41)}といい、この言葉は、露店などで臨時に作る簡単な屋根を意味する、同音の「排子:paizi」^{注42)}が語源とされる。さらに、清末の北京を撮影した『Views of China』には「商店の正面は塗り立てられ鍍金を施されて豪華だが、これらの建物はみな大都市の固定的に構えられた住宅や店というより仮設小屋といった外観を呈している」^{注43)}とある。実際、調査した勾連搭の多くが容易に増築できる構造となっている（図19）。これらのことから、勾連搭は仮設物から発展し、しだいに建築物として固定化したものだと考えられる。

では、勾連搭が侵街によって形成されたとすれば道幅も狭くなるはずである。そこで、1978年測の地図で伝統的な商業地の「西四」と「東四」を比較してみると、西四北大街は、元代の大都建設当初の道路幅員の約36メートル（24歩）と同じ幅員を示すが、東四南大街は25メートルと狭くなっている（図20）。明代後半から東四は西四より繁華な商業地だった地域であり^{注44)}、それゆえ東四では侵街によって幅員が狭くなったことを明確に示す事例であろう。その幅員の差が2棟の奥行きとほぼ一致する点、東四に勾連搭が数多く

分布している事実は、それを裏付けている^{注45)}。

以上、勾連搭は、18世紀初頭から侵街と深く結び付いて形成され^{注46)}、時代を経るにつれ、建築の格式の高さを示すものとして流行し、それが一般化されて一つの建築形式として定着するその過程を指摘することができた。

4. まとめ

北京旧城内の町屋を対象に建築形式と空間構成について考察してきた。清代の北京では、道路骨格や街区形態、敷地割り、敷地の規模・形態などの都市構造、および当時の人口や職種、不動産売買、家屋税などの社会的背景と深く結び付いて二つの町屋形式が存在したことをまず明らかにした。

棟を前後に連続して全体を構成する勾連搭式店舗は、内城の幹線道路沿いや外城など、狭い敷地が高密度に並ぶ商業地の構造と結び付いて成立した。とくに、内城における町屋は当時の不動産売買と密接な関係があることも指摘した。一方、中庭を挟みながら後方に展開する中庭式店舗は、外城の幹線道路沿いや、間口のやや広い敷地が並ぶ商業地の構造と結び付いて成立した。とくに、奥に長い町屋が商業地に密集する背景には、当時の極めて高い外城の人口密度や間口に課せられた税などと深い関係があったことを指摘した。

また、これら二つの町屋形式は、それぞれの立地条件によって、店舗の機能を分離、拡張することで多様な空間を構成したことを明らかにした。とくに、町屋がもつ勾連搭という屋根構造は、18世紀初期から、商人たちの商業活動が非常に活発化していく中で、彼らによる侵街という行為と深く結び付いて形成されたことを指摘した。

図17 1100年頃の屋根を架け足した店舗群（『清明上河図』）

図18 1716年の『萬寿盛典図』をもとに作成した勾連搭の形成過程のシュミレーション

図19 容易に増築できる勾連搭の構造

図20 異なる幅員の西四付近と（左）東四付近（右）（1978年の都市図）

注

- 注 1) 北京では、明代・嘉靖 43 年(1564 年)に城外の南側に形成された市街地を城壁で囲い、内城と外城からなる凸型の都市形態が誕生した。その後、民国時代に至るまで、内城は貴族や官吏などが暮らした、いわば山の手であり、外城は庶民が暮らす下町であった。内城と外城は都市骨格も大きく異なり、内城は基本的に元代の都市計画を継承するもので、基盤目状の構成であり、外城は迷路状の不規則な構成となっている。
- 注 2) 北京の店舗に関する研究としては、梁思成『建築設計参考図集 第三集 店面』中国营造学社、1937.1、魏萍 楊福海「前門地区傳統商業街巷特点探析」『建築創作』北京市建築設計研究院、2007(第 12 期)があるにすぎない。梁思成は立面類型、魏萍・楊福海は平面類型から分析している。いずれも単体の建築として扱ったもので、都市的な視点で考察したものではない。
- 注 3) 北京の建築について都市的な視点で考察した主な既往研究は、筆者を含む研究会による一連の研究成果として、『中国北京における都市空間の構成原理と近代の変容に関する研究(1)(2)』（中国建築都市研究会・代表 陳内秀信、住宅総合研究財団、1996.12）、「北京の都市空間と近代の変容に関する研究 その 1 その 2」『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』（笠井健 高村雅彦 陳内秀信、日本建築学会、1997.9）、『北京 都市空間を読む』（陳内秀信 朱自煊 高村雅彦編、鹿島出版会、1998.2）がある。
- 注 4) 中国の町屋に関する研究については、高村雅彦「中国における『町屋』の成立過程とその変容-アジアの比較建築史・都市史の視点-」『東アジアから日本の都市住宅（町屋）を捉える』日本建築学会、2007.8 に詳しい。
- 注 5) 『乾隆京城全図』は、清代乾隆年間（1750 年頃）に作られた 650 分の 1 の大縮尺の地図（中国国家第一資料館蔵）。出版物として数種類のものが現存し、本稿では、興亜院華北連絡部政務局調査所（1940 年）のものを使用している。出版物の種類に関しては、井原弘「新版『乾隆京城全図』について（上）（下）」『東方』183、184、東方書店、1996 に詳しい。
- 注 6) 18 世紀の北京の市井を描いた主な絵画史料として、①1716 年の『萬寿盛典図』、②1761 年の『日月合璧五星聯珠図』、③1767 年の『京師生春詩意図』等がある。①は『万寿盛典』北京古籍出版社、1996、及び瀧本弘之編『清朝北京都市大辞典・康熙六旬萬寿盛典図・乾隆八旬萬寿盛典図』株式会社遊子館、1998.4 に、②は『京華歳朝』国立故宫博物院、2008.12 に、③は『清代宮廷絵書』文物出版社、1995.4 に掲載されている。
- 注 7) 清国駐屯軍司令部編『北京誌』博文館、1908.12
- 注 8) 本稿でいう敷地の間口とは前面道路からみた建物正面の間口を指す。北京にかぎらず中国の都市部では、一般に各建物を敷地境界に沿って建てるため、敷地間口と建物間口が同じになることが多い。
- 注 9) 中国で間とは、間口方向の柱間の数を指す。実測調査を行ったものでは、1 間 3m 前後のものが多い。
- 注 10) 高村雅彦『中国江南の都市とくらし』山川出版社、102 頁、2000.12 では、実測調査を行った鎮の住居の間口は一般に 6～10m 前後に統一され、奥行きには一定の収束範囲が認められないと指摘している。
- 注 11) 筆者が 1993～96 年に調査した四合院住宅は、小規模なもので間口約 18m、奥行き約 23m、大規模なもので約 70m 四方であり、全体的に規模が大きく、形態はやや縦長の正方形であった。詳細は、前掲注 3『中国北京における都市空間の構成原理と近代の変容に関する研究(1)(2)』を参照。
- 注 12) 筆者は、町屋の建築形式の呼称を「建築類型」+「建築用途」=「建築形式」という意味で「〇〇式店舗」とした。例えば四合院住宅、「四合院：建築類型」+「住宅：建築用途」と同様である。
- 注 13) 勾連搭という用語は、古い資料では 1902 年の不動産売買契約の記録（張小林『清代北京城区房契研究』中国社会科学出版社、334 頁、2000）に「鈎連搭房」とある。前掲注 7『北京誌』837 頁、中国建築史編集委員会編『中国建築簡史』中国工業出版社、349 頁、1962 に「勾連搭」とある。
- 注 14) 筆者による実測成果から、最も大きな勾連搭式店舗と最も小さな四合院住宅の面積を比較すると、勾連搭式店舗は四合院の約 3 分の 1 である。
- 注 15) 中国では、一般的に中庭建築の形式を「院落式」「天井式」と呼ぶ。前者は中国北方の中庭が広い建築を、後者は南方の中庭が狭い建築を指すことが多い。本稿では両義を含む日本語の「中庭式」という用語を用いた。
- 注 16) 前掲注 7、805 頁。
- 注 17) 前掲注 10、36 頁では、江南地方でも、幹線道路や主要水路に商業地が、支線道路や支流に居住地が形成される傾向が強いと指摘している。
- 注 18) 郭憲「乾隆京城全図にみる北京内城の街区構成と敷地分割に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』第 536 号 163-170 日本建築学会、2000.10 では、乾隆時代の大街と胡同で囲まれた方形の街区は、元代の基本敷地を継承しつつも、縦方向に分割される傾向にあり、一方南北方向の大街などに接する所の敷地割りは複雑になると指摘している。

- 注 19) 震鈞『天咫偶聞』（北京古籍出版社、212 頁、1982.9）「内城房式異於外城。外城式近南方、庭宇湫隘。内城則院落寬闊、屋宇高宏。」。
- 注 20) 韓光輝著『北京歴史人口地理』北京大学出版社、128 頁、332 頁、1996。
- 注 21) 北京大学歴史系[北京史]編写組『北京史』北京出版社出版、356 頁、1985。八旗人とは清朝の軍人とその家族を指す。軍隊の八旗は、満州人を中心に、漢人、モンゴル人で組織された。清朝設立当初、八旗人は内城、その他漢人などは外城に居住するよう規制された。
- 注 22) 前掲注 20、313 頁では、外城の人口は清代初頭(1650 年)約 14 万人、乾隆末 (1790 年) 約 19 万人、宣統 2 年 (1910 年) 約 30 万人としている。
- 注 23) 張小林『清代北京城区房契研究』中国社会科学出版社、115 頁、2000.9 に引く『大清会典事例』巻 1146、『八旗都統・公式・禁令一』。これによると、もともと内城に居住するよう規制された八旗人は、康熙 4 年頃から自ら外城に移住するようになり、次第に移住者が増加していったという。
- 注 24) 前掲注 20、315 頁に引く夏仁虎『旧京瑣記』巻 9。
- 注 25) 前掲注 23『清代北京城区房契研究』によると、清代各朝の不動産売買契約の記録数は乾隆期から急増し乾隆年間には 257 件ある。そのうち約 200 件余りが内城での契約である。
- 注 26) 曹子西主編『北京通史』7 巻、中国書店、145 項、1994 に引く『清高宗実録』巻四百五十五。「多有拆售房屋、戸戸等借以居寄射利的陋習」。
- 注 27) 屋税に関しては、草野靖「宋代の屋税地税について」『史学雑誌』第 68 編第 5 号、史学会、1959.4.20、梅原郁「宋代都市の税賦」『東洋市研究』第 28 巻第 4 号、東洋史研究会、1970.3.31 に詳しい。
- 注 28) 李莉「中国歴史上の物業税」『中国財經報告』2009.6.4 (<http://bj.house.163.com/news2/090604/264/563236-1.shtml>)。
- 注 29) 叶夢珠『閩世編』巻 6、賦税（中華書局、163 頁、2007.9）
- 注 30) 新村出編『広辞苑』第四版、岩波書店、1993。
- 注 31) 『辞源』商務印書館、1992。
- 注 32) 北京の小売店と倉庫・旅館に該当する名称して、それぞれ、「廊房…、召民居住宅」「店房…、召商居貨」（明 沈榜編著『宛書雜記』第七巻 河字）、「舗面房」「店房」（『清会典』巻 98）などがある。
- 注 33) 前掲注 7、806 頁、雲郷著／井口晃・杉本達夫訳『北京の風物』東方書店、35 頁、1986。
- 注 34) 前掲注 33『北京の風物』に引く、柴桑『燕京雜記』（康熙～雍正年間）。
- 注 35) 前掲注 7、837 頁。
- 注 36) 北京における家屋の階高規制に関する一次史料は見当たらないが、前掲注 7 及び高巍等著『四合院』学苑出版社、61 頁、2007.1 などと言及されている。一般的に清代初期の内城において 2 階建て以上は禁止されていたが、しだいに緩和されていったとされる。
- 注 37) 2 階部分の後退に関する一次史料は見当たらないが、王永武『話說前門』北京燕山出版社、22 頁、1994.8、前掲注 2「前門地区傳統商業街巷特点探析」、前掲注 36『四合院』61 頁、で言及されている。
- 注 38) 侵街については、木田知生「宋代の都市研究をめぐる諸問題」『東洋市研究』第 37 巻第 2 号、東洋史研究会、1978.9.30 に詳しい。また、前掲注 10、97 頁では、江南地方での運河埋め立による侵街を指摘している。
- 注 39) 于敏中等編『日下舊聞考』巻 55「北京正陽門前搭蓋棚房、居之為肆」。この露天を建てる侵街の様子は、1767 年の『京師生春詩意図』に描かれているが、それが常設化した建物は 1750 年頃の『乾隆京城全図』に描かれている。つまり時代が逆になっている。おそらく前者は、当時の文献等も参考にして旧時の様子を描いたものかと推察される。
- 注 40) 愛知大学中日大辞典編集部『中日大辞典』大修館書店 1992.4。
- 注 41) 「拍子」という用語は、乾隆年間の『円明園内擬定舗面房裝修拍子以及招牌幌子則例』の中で見られる。
- 注 42) 前掲注 2「前門地区傳統商業街巷特点探析」。
- 注 43) モリソン『Views of China』(東洋文庫所蔵)「the shop fronts are gorgeous with paint, and gilding, but all these houses have more the appearance of temporary shanties than the settled abodes and stores, of a great city」
- 注 44) 前掲注 19、216 頁には「東富西貴。蓋貴人多住西城、而倉庫皆在東城。（中略）蓋富貴人多喜居東城」とある。これを踏まえて、筆者は前掲注 3『北京 都市空間を読む』で、清代北京の東側は富裕層が多く住み、商業的にも西側より繁華であったとことを明らかにした。
- 注 45) 道路幅員が変化していない場所に勾連搭の町屋が建っているところもあるが、それは、侵街によって形成された勾連搭ではなく、道路境界に沿って勾連搭をもとから建てたものとして捉えられる。
- 注 46) 勾連搭の町屋は、18 世紀より以前から存在していたと思われるが、18 世紀初期から不動産売買、侵街などの都市の活動が非常に活発化したことから、この頃から一般に普及していったと推測される。

(2009年12月10日原稿受理、2010年 2 月12日採用決定)